

## 復元建物の維持管理から見てきた出島 本会会員・長崎市出島復元整備室 和田 奈緒

出島の復元整備事業は、平成8年度から本格的に始まり、その結果、16棟の復元建物が完成、現在、公開されている。

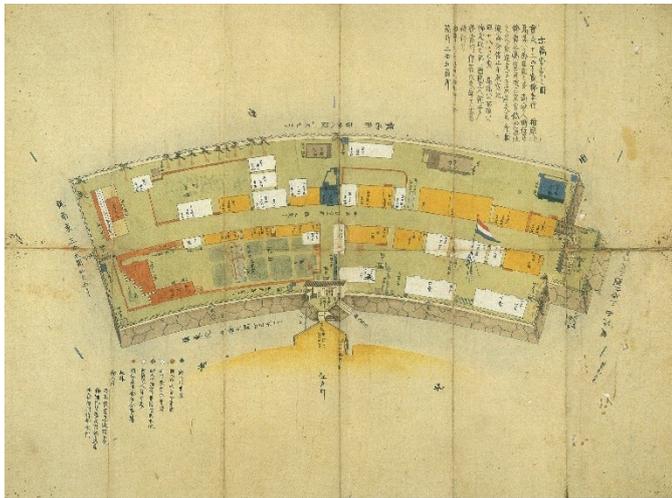
復元整備事業は、建物の完成をもって完了する事業ではなく、その後の維持管理も重要である。出島の建物は、伝統的な技法を用いて建てられており、ほとんど全てが木造建築である。それゆえ、外部の環境に左右されやすく、年間で大小さまざまな修理が必要となっている。それは現在に限ったことではなく、江戸時代から出島では修理が日常的に行われていた。

### 1. 江戸時代の出島の修理事情

当時の修理事情については、江戸時代の出島を描いた絵画や絵図をはじめ、歴代商館長が公務日誌として記録した「長崎オランダ商館日記」などから読み取ることができる。

「出島歩刻之図」(図1)などの資料から、オランダ商館、出島町人、幕府の三者で明確に普請の分担がされていたことが明らかになっている。建物の損傷が発生した際は、持ち主による検査、大工による見積もり、修理金額の合意をもって普請が発注された。

「長崎オランダ商館日記」からは、漆喰の落下や雨漏り、木部の腐朽などの建物の劣化状況、修理に関する人の出入り、災害の影響など当時の様子が分かる。単純な修理だけでなく、蔵の窓に盗難防止対策を施す様子や階段の位置の変更など建物の改修、改築をしている例も確認されている。



(図1) 出島歩刻之図(長崎市出島復元整備室所蔵)

### 2. 現在の出島の修理事情

第I期復元建物が完成した平成12年(2000)から現在までに様々な修理を行ってきたが、近年では塗装の塗り替えなど足場を必要とする大掛かりな修理が必要となってきている。そこで、出島に整備されている16棟の復元建物のうち10棟(第I・II期建造物)については、令和2年度から区画ごと建物ごとに年次計画を立て、改修工事を開始した(図2)。

基本的には復元当初の状態に戻すこととし、塗料の塗り直しや、劣化部材の更新を行う修理をするが、劣化の原因が明らかで、改変を加えることで建物を長く持たせることができると見込まれる場合には、雨水の進入を防ぐため木部に銅板を巻く、傷みやすいベランダを建物躯体から切り離して独立させ、次回の改修を行いやすくするなど、随時仕様の変更を行っている。



(図2) 令和4年度に改修したカピタン部屋

### 3. 復元整備事業のこれから

江戸時代と現在の修理内容を比較すると、漆喰の剥落や塀の損傷、ベランダ部材の劣化など一部に類似する点も見受けられる。歴史に忠実な復元整備は、19世紀初頭の出島の町並みをよみがえらせると同時に、当時の人々が抱えていた修理に関する悩みも再現する結果となった。

当時の人々は、都合の悪い仕様を変更し、改修することで悩みを解消していた。しかし、歴史の中のある一時期の建物の姿を対象とし復元整備している今の出島は、過去の人々よりも修理に固執せざるを得ない状況となっている。

昨今の社会情勢を受け修理費用は高騰しているが、安全に見学でき、史跡の価値を損なわないためには、建物の維持管理は必要である。単に現状復旧するだけでなく、出島らしさを保ったまま改修できる方法を見極め、建物を長く持たせることも建物復元後の重要な検討事項となっている。

本稿は令和6年2月例会の発表の要旨である。

#### 参考文献

- 波多野純建築設計室編『国指定史跡「出島和蘭商館跡」西側5棟建造物復元工事報告書』長崎市教育委員会 2001年  
 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記1～10巻』雄松堂 1989～1999年  
 松方冬子他編『一九世紀のオランダ商館 上・下』東京大学出版会 2021年